

平安京周辺部の別業における 地形的圍繞の空間的特性

山口 敬太¹・川崎 雅史²

¹学生会員 京都大学大学院博士課程 工学研究科都市環境工学専攻 (〒615-8540 京都市西京区京都大桂)
E-mail:Keita.Yamaguchi@t23x1791.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

²正会員 京都大学大学院教授 工学研究科都市環境工学専攻 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂)
E-mail:kawa@art.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

地形の変化に富む京都盆地の山裾部には、多くの名勝や庭園が存在するが、これらのうちの多くがもとは平安時代の別業であった。本研究は、平安京周辺部の別業を対象として、別業の周囲の地形がつくる空間の特性について考察を行った結果、別業では、[1]二方向以上を視対象となる山によって圍繞されており、[2]別業を中心として地形を境界とする視覚的な閉鎖空間が形成されており、[3]圍繞されながらも眺望性・見通しにも優れていた可能性があったことが共通の特徴であることを明らかにした。さらに、地形条件によって、空間の規模などの空間的特性の異なる4つのタイプの地形的圍繞があることを示した。また、平安京周辺部は、別業を中心とする地形的圍繞空間が連なる構造を有していることを示した。

Key Words : *topographic features, enclosure, spatial characteristics, villas in Heian-kyo*

1. 研究の背景と目的

(1) 背景と目的

地形の変化に富む京都盆地の山裾部には、多くの名勝や庭園が存在する。古人々は、地勢に勝れた地を選び、別荘や寺院を造り上げてきた。これらの起源を遡ると、平安時代に造営された別業であることが多いことが分かる(次頁図-1)。別業は、貴族たちが平安京内の住まいとは別に、自然との接触を楽しむ場所として造営された別荘である。この別業の選地は、後の時代に風景文化が展開する場所を選んでいるという点で、日本の風景の歴史を考える上で重要な意味を持っている。

これら別業の地を概観すれば、山々や谷などの自然地形によって圍繞されるという共通した空間的特徴がみられる。藤原京や平城京、出雲国などの古代都城において既に、山に囲まれた地を好んで選んでいた¹⁾。別業の造営においても、地形がつくる適度の圍繞感や領域感覚、周囲の景観が重要視されたと推察できる。地形がつくるどのような空間的特性に、人間が好ましさを感じてきたかを知るにあたり、平安京郊外の別業は最適な研究対象であると考えられる。このような地形がつくる空間的特性は、近代以降の都市建設・計画において、十分な評価をされてこなかったが、今一度評価されるべきであろう。

本研究は、平安京郊外の別業における地形的圍繞の空間的特性について明らかにすることを目的とする。まず、

別業における地形に対する認識を基礎的情報として整理するために、当時の文献資料から別業周囲の地形に対する記述の内容を整理する(2章)。本論では、時代変化による変化が少ない地形を手がかりに、三次元地形モデルを用いて空間を再現した上で、各別業における地形的圍繞の空間的特性を定量的に把握し、さらに地形条件を考慮した上で地形的圍繞の分類を行い、各タイプごとに空間的特性に関する考察を行う(3章)。

(2) 研究の位置づけ

地形がつくる空間的・景観的特性についての先行研究として、古来日本人が好んだ空間的構造に関する樋口の研究²⁾や、港における地形的圍繞の空間の特性について明らかにした斎藤らの研究³⁾、山間部の城下町を対象にして地形的圍繞による空間の領域性を明らかにした今野・堀の研究⁴⁾、盆地地形内の集落と山との景観的関係を明らかにした秋本らの研究⁵⁾などがある。本研究は、これらの先行研究の基本的な考え方を引き継いでいるが、既往研究が伝統的集落や港、城下町を扱っているのに対して、本研究では風景を楽しむための場所としての性格がより強い別業を対象にすることで、地形や山と風景との関係について、異なる側面から明らかにできると考えた。また、圍繞された内部の視点から、地形の見えをもとに空間的特性を考察するという点も本研究の特徴である。

平安時代の別業に関する既往研究として、歴史地理学や文学において研究の蓄積があり⁶⁾、なかでも『平安京提要』⁷⁾には、別業に関する多くの知見がまとめられているが、これらは別業周囲の地形がつくる空間的特性には言及していない。また、別業の地形がつくる空間的特性について論じた山田や星野・斎藤の研究⁸⁾⁹⁾や、地形がつくる景観的特性について借景に着目した本中の研究¹⁰⁾が参考になるが、これらは別業における地形的圍繞の空間的特性については言及していない。

(3) 研究の方法

『平安京提要』の「離宮と別業」で取り上げられた別業の立地は、1)野・山の辺、2)川・池の辺（特に巨椋池と桂川）、の2つに大別できる。本研究では、地形による圍繞に着目するため、『平安京提要』で取り上げられた別業のうち、立地が特定できないものと、池・川辺のものを除いた、15の別業を研究対象とした¹¹⁾。これらの別業と、平安京内の有名な庭園の立地を図-1に示す。

地形的圍繞は、空間的概念であるが、視点からの見えによって認識される。そこで本論では、別業の周囲の地形がつくる空間的特性について明らかにするために、別業周囲の地形を3次元コンピュータグラフィクス上に再現した上で、1)山の仰角と見渡し角度による空間の圍繞性の評価、2)可視領域・圍繞距離からみた空間の閉鎖性と領域空間の規模の評価、3)可視領域から見た眺望性の評価、の三点から定量的な把握を行った。本研究では、さらに、別業周囲の地形条件に着目し、地形条件ごとに圍繞の仕方を類型化し、それぞれについて空間的特性を考察した(3章)。

地形の再現には、国土地理院発行の標高データ「数値地図 50m (標高)」と「数値地図 5m (標高)」とカシミール¹²⁾を用いた。作成したモデル空間上で、別業の立地地点を視点場として、周囲を360°カメラで撮影し、展望図を出力、同時に可視領域を出力した（例：嵯峨院からみた展望図、図-2）。

2. 史料にみる別業周囲の地形に対する認識

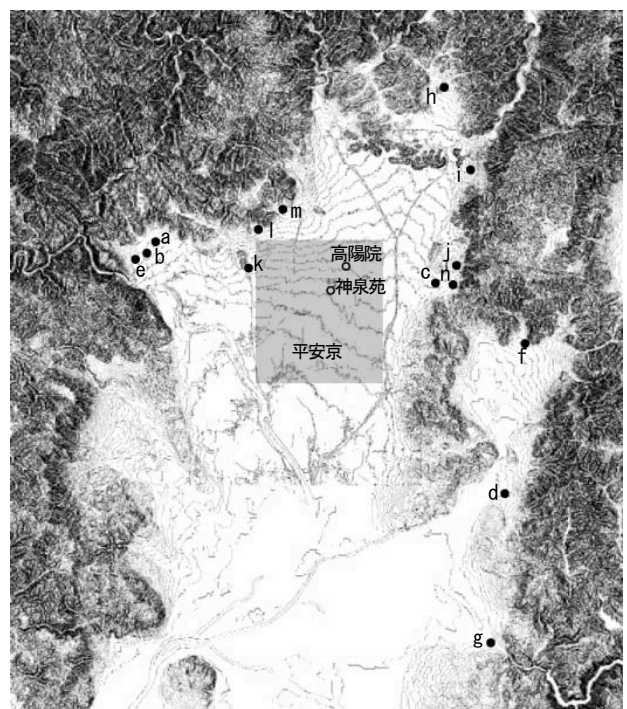
本章では、別業における地形に対する認識についての基礎的情報を整理することを目標として、代表的な別業に関連する文献資料（詩歌や物語などの文学作品を含む）の記述から、別業ごとの地形に関する記述内容を整

理した。ただし、本章で取り上げた別業は、周囲の地形に関する十分な記述が見られるものに限られた。

(1) 別業の概要

別業造営の目的は、豊かな自然環境の中での、1)遊獵における休息、2)漢詩・和歌の会や、管絃・酒宴を開くこと、3)避暑、4)隠居、であったとされる¹³⁾。別業の地は、人々が山水の面影を感じ、詩を賦し、和歌を詠む、文芸の中心となる場所であった。そのため、別業において詠まれた詩歌からは地形に対する認識が読み取れると考えられる。

当時の別業の様子の詳細を明らかにする文献史料が少ない中で、平安末期の別業の様子を描いた唯一の絵図史料に、国宝の「山水屏風」（神護寺・鎌倉初期）がある。



別業名	現在地
a 嵯峨院	大覚寺
b 樓霞観	清凉寺
c 藤原良房山荘	
d 日野家別業	
e 藤原定家山荘	厭離庵
f 人康親王山荘	
g 源融別業	宇治平等院
h 藤原公任山荘	
i 南淵年名別業	赤山禪院/修学院離宮
j 藤原氏宗山荘	法金剛院
k 清原夏野山荘	法金剛院
l 藤原実能山荘	龍安寺
m 仲資王別業	鹿苑寺金閣
n 藤原関雄山荘	永観堂

図-1 平安京周辺の地形と別業の立地

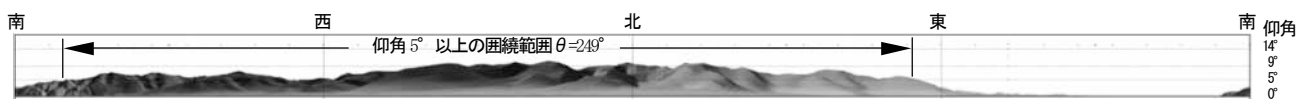


図-2 地形モデルを用いた 360°方向の展望図（例：嵯峨院）

表-1 「山水屏風」における描写の特徴

位置	描写の特徴
場面 左	なだらかな山の峰により周囲を囲まれた寝殿造り風の建築と苑地、池に面した建築内での貴族らの遊樂の様子が描かれている。
場面 右	周囲を大きく山並みに囲まれ、川に面する建築と、野で遊ぶ貴族らが描かれている。敷地の一部を垣によって囲んでいるが、人工物による明確な敷地の圍繞は見受けられない。
中央	高山を背負い、周囲を近距離の山によって囲まれた建築が描かれている。

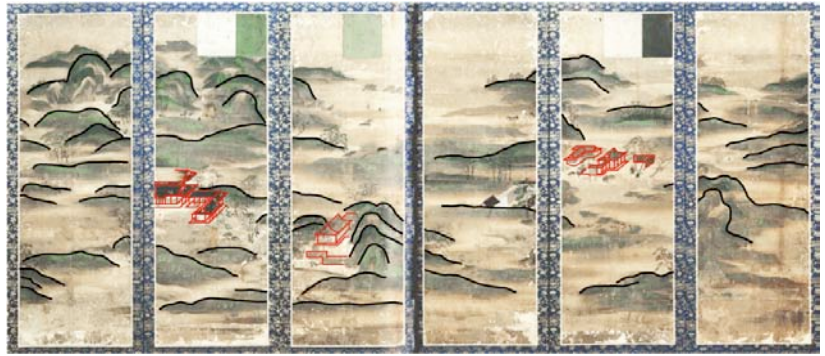


図-3 「山水屏風」に描かれた別業と山（峰および建築の輪郭線は筆者加筆）

山水屏風には、3つの別業が描かれており、その周囲にはなだらかな山の峰が数多く描かれ、これらは別業を圍繞している（図-3、表-1）。描かれた数多くの山峰からは、別業での生活において、周囲の山を重要視していた可能性を伺い知ることができる。

(2) 文献資料にみる別業周囲の地形に関する記述

a) 嵯峨院 (a)

嵯峨院においては、唐風をならった詩会がしばしば開かれ、多くの漢詩に別業の景色が詠まれている。たとえば「嵯峨之院埃塵外...地勢幽深¹⁴⁾」や、「此地幽閑人事少」「山院幽深無所有¹⁵⁾」と表現されているように、周囲の奥深い地勢が詠まれ、そこが京中の俗塵とは無縁であることが度々賞賛されている。嵯峨野には他に棲霞観(b)や定家の山荘(e)などの別業の造営があった。

b) 良房別業(白河院)(c)

東山の山麓に形成した扇状地である白河の地に造営された良房別業(白河院)については、『本朝麗藻』¹⁶⁾に「白河院者、城東第一之山庄也。積九峯於華岳、十其峯而化成。(白河院は城東第一の山荘である。山々は華岳にある多くの峰を積み重ね、その山峰を十倍したほどに聳え立っている。) ...蓋風月勝賞之家、春秋耻醉之地也。

(風月景勝の邸宅なのであり、春秋行楽の土地なのである)」とあり、周囲の山並みが作り出す景観が評価されている。同時に「春色眇焉処々生 望無辺畔幾多情 ... 四面紅花風豈限 寸眸緑草境難名(春の景色は遠く高くして此処彼処にあまねく生成し、眺めればそれは際限なく続いて幾多の情を掻き立てずにはおかない。...四方の赤き花咲く風景はほとんど無限に広がり、眼に映ずる緑なす草の境界もそれとは判別しかねる。)」と、別業周囲の野の広がりやが評価されている。この白河の地には、9世紀以降、数々の藤原家の別業の造営があった。

粟田の山荘(詳細は不明)を訪ねた藤原公任は、「浮き世をば峰の霞やへだつらむなほ山里はすみよかりけり(千載和歌集,1188)」と、峰(と霞)によって京中とは隔てられた、住みよい「山里」の境地を歌にしている。ここでは、別業(山里)は「住み良い場所」として捉え

られている。「峰の霞やへだつらむ」という言葉からは、山里が憂き世から離れた逃避先であることを実感するために、「峰」すなわち地形が、都と山里とを分ける心理的な境界として認識されていたことが読み取れる。

c) 源融別業(g)

宇治にある源融別業(後の平等院)は、『本朝文粹』に「洛城の南面に。一の勝境有り。蓋乃ち左相府の別業なり。長河其前を經。湖尾を洩らして今海口に漸る。四山其畔を廻り。西葱を疊みて今東葉を峙つ。¹⁷⁾」と、川を挟んで四方を山に囲まれた「勝境」であると表現された。同じく『本朝無題詩』には「宇県風流趣奈何 翠簾四面得山河 春花秋月不如此 金谷南樓其任他(宇治の自然の趣はどうかという... みどりの簾の四方には美しい山河が眺めやられる。春には花、秋には月と、折節この地には及ぶところはあるまいし、あの金谷園や南樓とて問題ではない。)」¹⁸⁾とあり、周囲の山並みの景観が高く評価されていた。

『源氏物語』「椎本」には、源融別業がモデルとされる宇治の別荘からの眺めが、「野山のけしき、まして袖の時雨をもよほしがちに、ともすればあらそひ落つる木の葉の音も、水の響きも、涙の滝も、一つもののやうに暮れ惑ひて、(野山の様子、まして時雨が涙を誘いがちで、ややもすれば先を争って落ちる木の葉の音も、水の響きも、涙の滝も、一緒のように分らなくなつて、)」¹⁹⁾と表現されている。ここでは野山の景色が山里における孤独や寂寥と結びつけられ、庭の景色は周囲を取り囲む山や川の景色と一体として捉えられている。

d) 清原夏野山荘(j)

清原夏野山荘(j)は、北は五位山、西は双岡に隣接し、南方は開けている。仁明天皇が訪れ、水木を愛賞し²⁰⁾、遊獵時には「蹕於墳上ニ駐メ、以四望地ト為ス²¹⁾」と、四方を展望できる場所として評価されていた。

平安初期において、平安京の四方に広がる野は、天皇が祭祀、巡狩する地であった。この野行行事において、重要であったのは、天皇の四周の山川を望覧することであり、それはすなわち四方を治めるということであったと指摘されているように²²⁾、行幸・遊獵の地としての

別業は、祭祀的な意味で、四方の眺望に優れていることが重要視された。

e) 南淵年名別業(k)

『源氏物語』「夕霧」の舞台となった小野は、現在の修学院あたりであると考えられている²³⁾。「小野の山里」の景色として、「夕霧」では「ことに深き道ならねど、松が崎の小山の色なども、さる巖ならねど、秋のけしきつきて、都に二なくと尽くしたる家居には、なほ、あはれも興も まさりてぞ見ゆるや。（特別深い山道ではないが、松が崎の小山の色なども、それほどの岩山ではないが、秋らしい様子になって、都で又となく善美を尽くした住居より、やはり、情趣も風情も立ち勝って見えることであるよ。）²⁴⁾」と表現されている。ここでは、野山の景色の美が積極的に捉えられている。

平安中期以降、物語や和歌などの文学作品の中で、別業は、都に対する「山里」（山里にある別荘や山寺という意味も含む）としてしばしば描かれた。源氏物語には「山里」という言葉が 58 例あり、その大半が、宇治と小野の二箇所であったことが指摘されている²⁵⁾。

(3) まとめ

前節に挙げた地形に関する記述からは、別業では、周囲の山並みの景観や、山に四方を囲繞されることが、評価されていたことが確認できた。山による囲繞や山の景色は、都とは離れた幽深な隠遁地の景色や、山里の景色を構成する主要な要素であったと考えることができる。また、地形が別業の地と都の俗塵と隔てる境界として認識されていたこと、別業では山に囲繞されるだけでなく、四方を展望することや野の広がりを感じることも評価されていたことが確認できた。

3. 別業における地形的囲繞の空間的特性

本章では、地形的囲繞が生み出す、様々な空間的特性に着目する。それは、1) 山などの緑地によって囲まれることで得る豊かな自然性であり、2) 地形が視覚的境界となって生まれる領域性や閉鎖性、それによって生じる内側性（外側との区別）²⁶⁾である。また、3) 囲繞されながら眺望を得られる空間は、アプルトンの隠れ場-眺望理論²⁷⁾における生息適地の条件を満たす。

本論では、このような別業における地形的囲繞の空間的特性を把握するために、別業の位置を中心（視点の位置）として、1) 山の仰角と見渡し角度による囲繞性の評価、2) 可視領域・囲繞距離からみた空間の閉鎖性と領域空間の規模の評価、3) 眺望性の評価、を行った。

(1) 仰角を用いた囲繞性の評価

本節では、別業において、視覚的にどの程度山に囲まれていたかを明らかにするために、前に述べた展望図（図-2）を用いて、四方の山の仰角を計測した（図-4）。広場や街路などの囲繞性を測るためにしばしば用いられる指標に D/H ²⁸⁾があるが、これは囲繞を構成する要素が、建築物等のように近距離にある場合については適用可能であるが、山による囲繞については、その距離・規模の大きさから D/H を用いるのは適当でないと判断した。本論では、山による囲繞性を測るために、仰角を用いた。囲繞感が得られる仰角の目安として、山として意識され始める仰角 5° 以上²⁹⁾、山が視対象としてみられるとされ、さらに閉鎖性感覚の下限の目安³⁰⁾となる仰角 9° 以上、とし、視界のなかで山が仰角 5° 以上に見える水平視野の角度（見渡し角） θ と、仰角 9° 以上の水平視野の角度（見渡し角） ϕ を測定した。この結果を表に整理したのが図-5である。

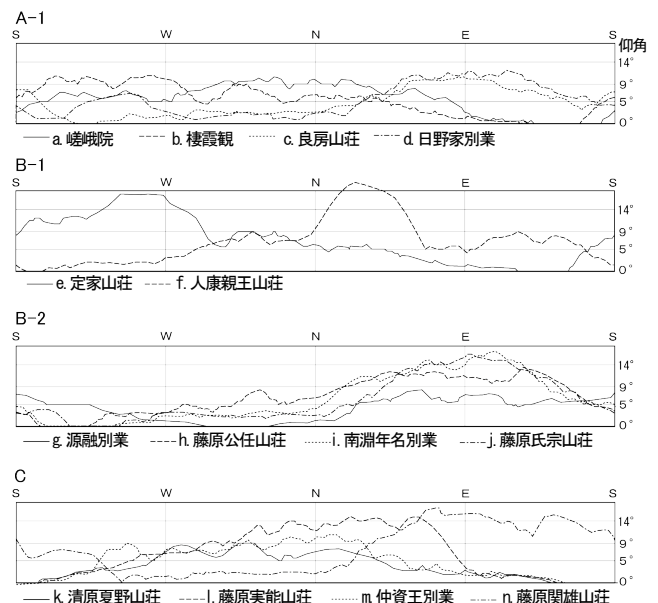


図-4 別業からみた山の仰角の水平分布

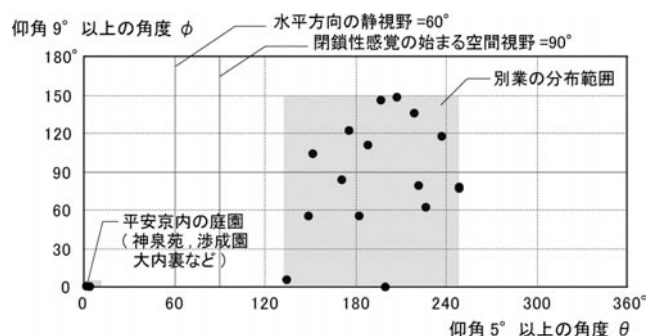
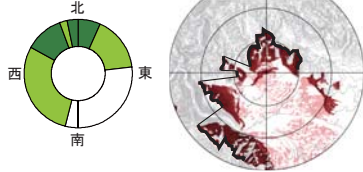


図-5 仰角別にみた山並みの水平囲繞角度の分布

(A) 広域圍繞 (山並み)

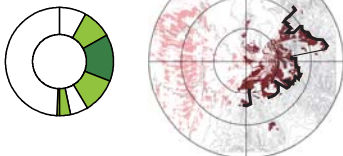
a. 嵯峨院 (大覚寺)
 $L=1.57, \theta=249^\circ, \alpha=45^\circ$



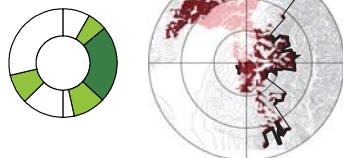
b. 棲霞院 (清涼寺)
 $L=1.64, \theta=221^\circ, \alpha=48^\circ$



c. 藤原良房山荘
 $L=1.59, \theta=136^\circ, \alpha=87^\circ$

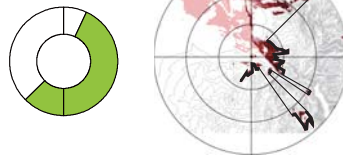


d. 日野家別業
 $L=2.01, \theta=171^\circ, \alpha=24^\circ$

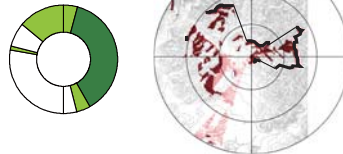


(B-2) 凹型・複合圍繞 (山並み+凹状地形)

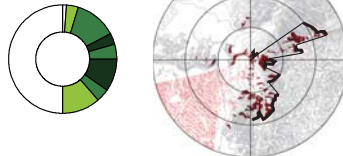
g. 源融別業 (平等院)
 $L=1.89, \theta=200^\circ, \alpha=36^\circ$



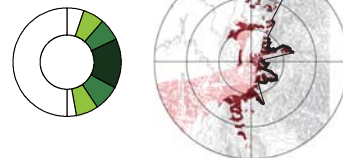
h. 藤原公任・小野皇后山荘
 $L=1.10, \theta=219^\circ, \alpha=18^\circ$



i. 南淵年名別業 (赤山禪院)
 $L=1.20, \theta=176^\circ, \alpha=53^\circ$



j. 藤原氏宗・北白川山荘
 $L=1.08, \theta=152^\circ, \alpha=33^\circ$

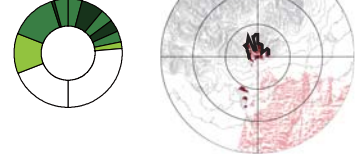


(C) 狭域圍繞 (凹状地形)

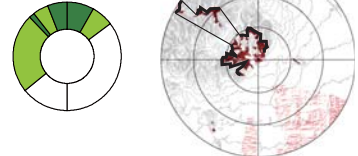
k. 清原夏野山荘 (法金剛院)
 $L=0.26, \theta=134^\circ, \alpha=106^\circ$



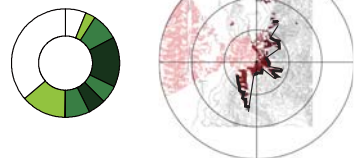
l. 藤原実能山荘 (龍安寺)
 $L=0.44, \theta=197^\circ, \alpha=88^\circ$



m. 仲資王別業 (鹿苑寺金閣)
 $L=1.04, \theta=182^\circ, \alpha=76^\circ$

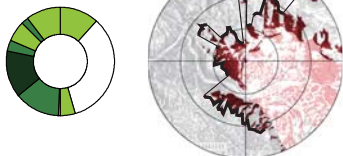


n. 藤原関雄山荘
 $L=0.68, \theta=207^\circ, \alpha=65^\circ$



(B-1) 凸型・複合圍繞 (山並み+凸状地形)

e. 藤原定家山荘 (厭離庵)
 $L=1.51, \theta=237^\circ, \alpha=64^\circ$



f. 人康親王山荘
 $L=2.16, \theta=227^\circ, \alpha=68^\circ$

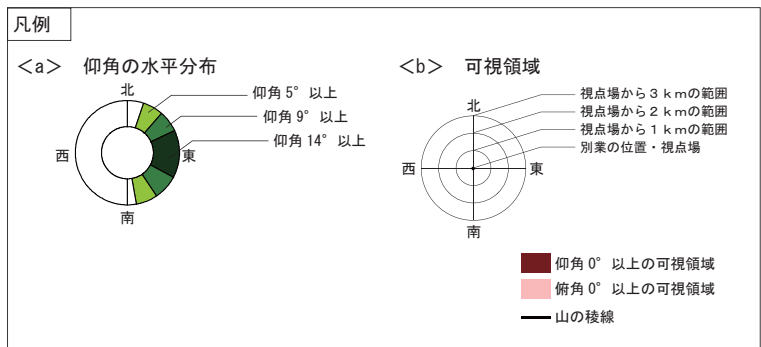
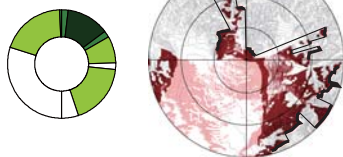


図-6 仰角・可視領域の分布と地形的圍繞の類型

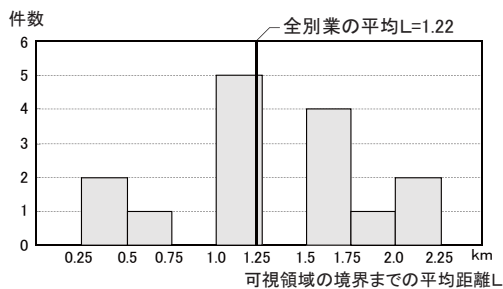


図-7 圍繞の平均距離 L の分布

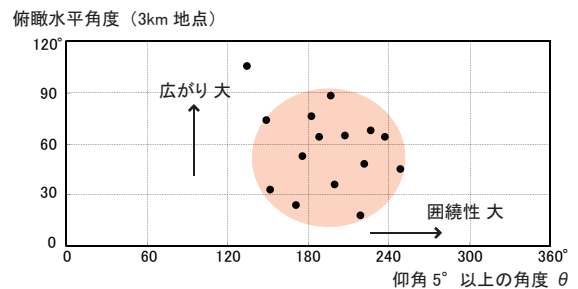


図-8 俯瞰 (3km 地点) の水平角度の分布

その結果、別業からみた、山として意識され始める(仰角5度以上の)山の見渡し角 θ は130~250°の範囲に分布した。また、対象とした別業の2/3で、 θ が180°を超えている。これは視覚的にみて、一方向を完全に山に圍繞されていることを意味している。対照的に、神泉苑や高陽院などの平安京内の庭園では θ が約0~2°と非常に小さい。さらに、視対象として意識される(仰角9度以上の)山の見渡し角 ϕ は約60~150°の範囲内で広く分散した。水平方向の静視野が約60°³¹⁾、閉鎖性感覚が始まる空間視野が約90°³²⁾であること考えると、別業から山が強く意識できていたことに加えて、山による視覚的な閉鎖性感覚も強かったといえる。

山の仰角のみを基に判断すれば、周囲二方向以上(130°以上)を仰角5°以上の山によって圍繞された別業では、周囲の山並みによって圍繞される感覚は非常に強かったと考えられる。

(2) 領域空間の規模の評価

本節では、別業において、地形を境界としてどのような領域空間が生じていたかを明らかにするために、可視範囲をもとに領域空間の規模を把握した。ただし、山がつくる領域空間に着目するため、山として意識される仰角5°以上の範囲に限った。

そこで地形モデル上で可視領域を出力し(可視範囲図は次頁図-6)、仰角5°以上の範囲(θ)のみに限り可視範囲の面積(S)を計測し、その面積 S から、可視範囲の平均距離 L ($L = \sqrt{360S/\pi\theta}$)を計算した(図-7)。

この結果、全ての別業において、別業を中心に、半径約3kmの距離内で(平均の圍繞距離 L は1.22km)閉鎖的な領域空間を形成していることが分かった。この領域空間の規模(L の分布)にはばらつきがあり、500m前後と平均前後、1.8km前後の大きく3つに分かれて分布した。ただし、各別業から見られる山の範囲は、500m~1.5kmの距離の領域に集中した。この領域空間の規模の違いは、空間的特性の違いを生む。領域空間の規模が小さいほど、囲まれる感覚はより強くなると考えられる。また山の見えに関しても、500m前後の距離では、一本一本の樹木が主な眺める対象になり、1.5km前後の距離では、樹木

の樹幹のテクスチャーがおりなすあやが、主に眺める対象となるなど³³⁾、見え方は異なる。

(3) 眺望性の評価

別業においては、山による圍繞性が強いことが分かった。山による圍繞性だけを得るためなら、別業は山中に造営すればよいが、山中には見られなかった。そこで、野や都への眺望を意味する俯瞰の見通しが重視されていたのではないかという仮説が浮かび上がる。そこで、これを検証するために、仰角 0°以下の可視範囲の分布から、距離約 3km 地点における可視範囲の水平角度を測定することで、地形条件による見通しの程度を評価する。その結果(図-8)、全ての別業で 3km 地点が可視範囲となり、その水平角度の平均値は 57.5°であることが分かった。これは水平方向の静視野とほぼ同等である。また、一箇所を除いたほとんどの場合で 90°以下であった。この結果から、別業では圍繞だけでなく、見通しにも優れていた可能性があったことが分かった。別業の造営において、圍繞感を得やすい山中に造営せずに野を選んだのは、野の空間の広がりやの享受が関係している可能性が浮かび上がった。

(4) 周辺地形を考慮した地形的圍繞の分類

以上の結果から、各別業に共通して地形による圍繞がみられ、それにより視覚的に閉鎖された領域空間が形成されていたことが明らかになった。別業毎に領域空間の規模には大きく差異が見られたが、これは周囲の地形条件によって生じている。そこで本節では、領域空間の規模と、別業周囲の地形条件に着目して、地形的圍繞を類型化し、各圍繞の型ごとに空間的特性の考察を行った。地形的圍繞のタイプは第一に、領域空間の規模によって分類が可能である(図-6)。地形的圍繞によって視覚的な領域を形成する境界までの距離(圍繞距離)が、方角に関わらずほぼ一定して大きい場合を広域圍繞とし、逆に圍繞距離が方角に関わらずほぼ一定して小さい場合を狭域圍繞とする。ほとんどの場合、広域圍繞は一定の距離を保ちながら離れた山並みによる圍繞、狭域圍繞は谷などの凹状の地形による圍繞となる。また、圍繞距離が

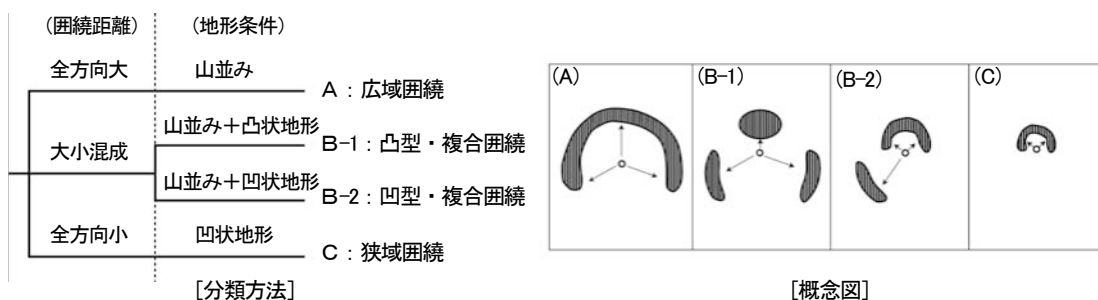


図-9 地形条件に基づく地形的圍繞の分類



写真-1 大沢池から望む山並み (撮影・パノラマ作成: 筆者)

方角によって大きく異なる場合、すなわち距離を保った山並みと近傍の地形によって一体的に圍繞される場合を複合圍繞とする。複合圍繞は、圍繞を形成する近傍の地形条件によって、1) 後背山 (近距離の独立峰) などの凸状地形との複合圍繞、2) 谷や扇頂部、小盆地などの凹状地形との複合圍繞とに分類できた。以上の結果、地形的圍繞を4つのパターンに分類することができた (図-9)。以下では、それぞれの地形的圍繞の型ごとに、空間的特性について述べる。

(A) 広域圍繞

a~dの別業はいずれも、1~3kmの距離を可視範囲として山並みに二方向以上を圍繞されている。主な圍繞構成面は、500m~1500m離れた、仰角5~10°程度の山並みである (次頁図-10, 11)。圍繞構成面となる山の立ち上がり部まで500m以上の距離を保つことで、山に圍繞された広大な野の領域空間が生まれている。また、山までの距離を保っているため、別業から眺めた際には、周囲の山並みは高低の変化が小さくならかに見える。

嵯峨院(a)においては、東-北-西にかけてを完全に山並みに圍繞されている。西から南にかけては小倉山に圍繞され広大な閉鎖的領域空間を形成している。嵯峨院の苑地とされる大沢池からは、今も三方に山並みを望むことができる。この池の水面の広がり、視点場近傍の視界遮蔽物をなくし、周囲の山並みを見渡すために大きな役割を果たしている (写真-1)。周囲の地形は平安時代から大きく変化がないと考えられるため、同様の眺めが得られていたと推察できる。

良房山荘 (白河院) (c)においては、南-東-東北にかけて山並みに圍繞され、北側を丘陵によって視界が遮られることで、広大な閉鎖的領域空間を形成している。この白河の地には、藤原氏をはじめとする数多くの別業の造営があり、院政の舞台ともなった。

(B-1) 凸型・複合圍繞

e, fの別業は、近距離で高仰角の山に隣接し、その後1~3kmの距離を可視範囲として山並みに圍繞されている。主な圍繞構成面は、近距離の山 (凸状地形) の山腹と、500m~2000m離れた、仰角5~9°前後の山並みである。定家山荘からみた小倉山、人康山荘からみた柳山ともに仰角が大きく (図-4)、空間は明確に方向付けされている。



写真-2 宇治川畔から望む山並み (写真鑑, 1881)

山科盆地の最北部に位置する人康山荘(f)は、野に突出した柳山の山麓の突端部に位置し、周囲をぐるりと山科盆地の山並みに圍繞されている (図-10, 11)。

(B-2) 凹型・複合圍繞

g~iの別業は、扇状地の扇頂部や谷などの凹状地形の内部に立地し、この地形に圍繞されながら、500~2kmの距離を可視範囲として山並みに圍繞されている。主な圍繞構成面は、数百メートルの範囲で別業を取りまく凹状地形の斜面と、500m~2000m離れた、仰角5~9°前後の山並みである (図-10, 11)。凹状地形により小規模な領域空間を形成しながら、その外側に山並みによる圍繞された領域空間を形成しており、二重に圍繞された領域空間の形成がみられる。

源融別業(g)では、北東-南東にかけての宇治川を挟んだ300~500mの範囲の山並みが主な圍繞構成面であり、その優れた山容景観の評価は高い³⁴⁾ (写真-2)。南方は近距離の山、北東-北は数キロ離れた山並みによって圍繞されている。

南淵年名別業(i)は、東を修学院山、北をその支脈に、西の横山に近距離を圍繞されながら、1km~2km離れた東山の山並みに圍繞されている。

氏宗山荘(j)では、仰角5°以上の範囲θが他の型に比べて小さいものの、黒谷と吉田山一帯が西-北にかけて視界を遮ることで、閉鎖的な領域空間を形成している。

(C) 狭域圍繞

k~nの別業は、凹状地形の内部に立地し、主に1km以内を可視範囲として、近距離の山に圍繞されている。主な圍繞構成面は、数百メートルの範囲で別業を取りまく凹状地形の斜面である (図-10, 11)。この凹状地形が非常に小規模で閉鎖的な領域空間を形成している。また一方は圍繞された空間の外側の平地に向けて開かれている。

実能山荘(l)、仲資王別業(m)ともに5,600m程度を直径とする凹地の中央付近に立地し、小規模な領域空間を形成しており、一方で平地に対して開いている。

(5) 考察

a) 別業の用途と空間との関係

別業造営の目的は、遊獵における休息や、漢詩・和歌の会や管絃・酒宴を開くこと、隠居であったとされることは前章までに述べたが、その造営の地の選定にあたっては、用途に適した場所を選んだと推察できる。本章で

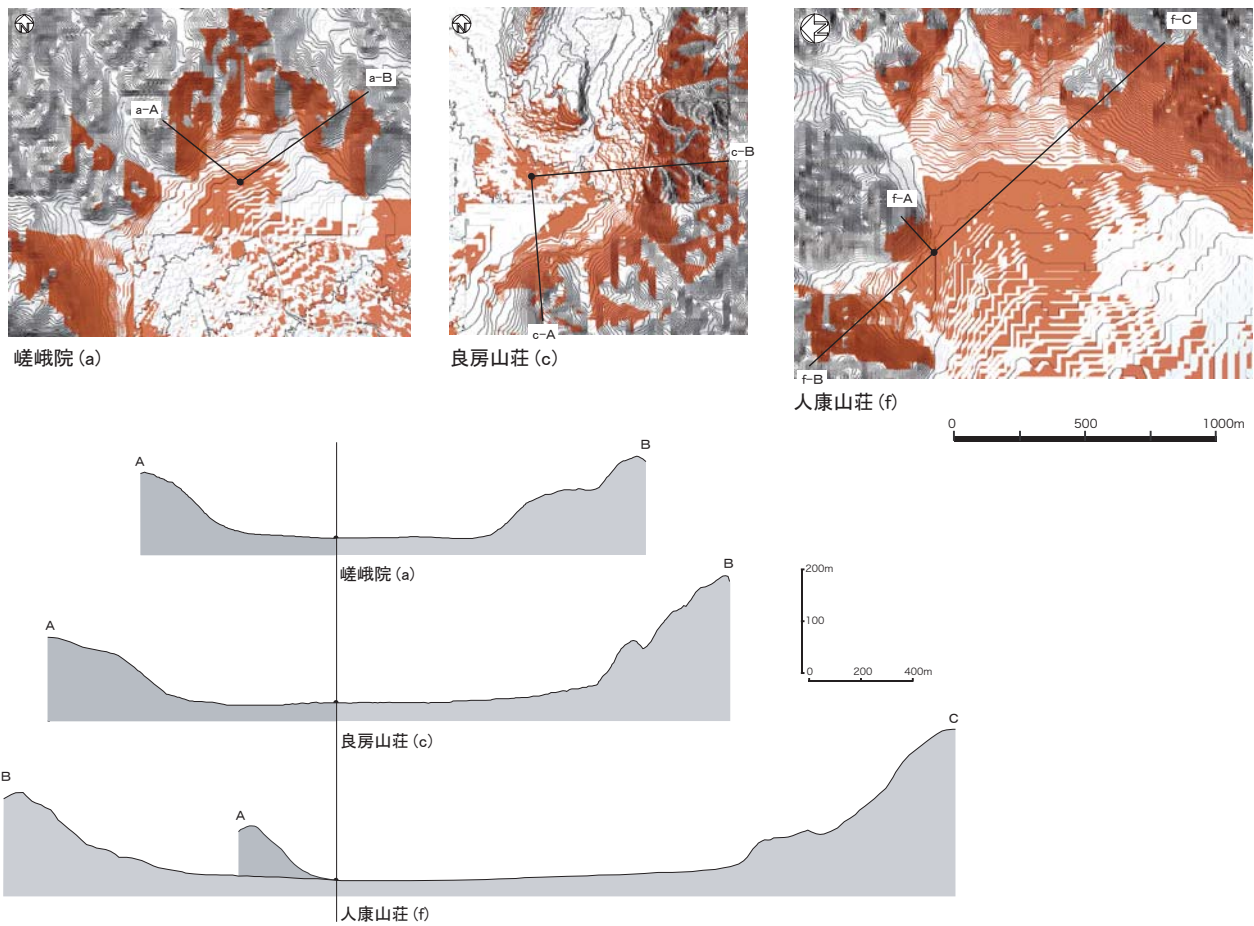


図-10 主な圍繞構成面とその断面構成 (a, c, f)

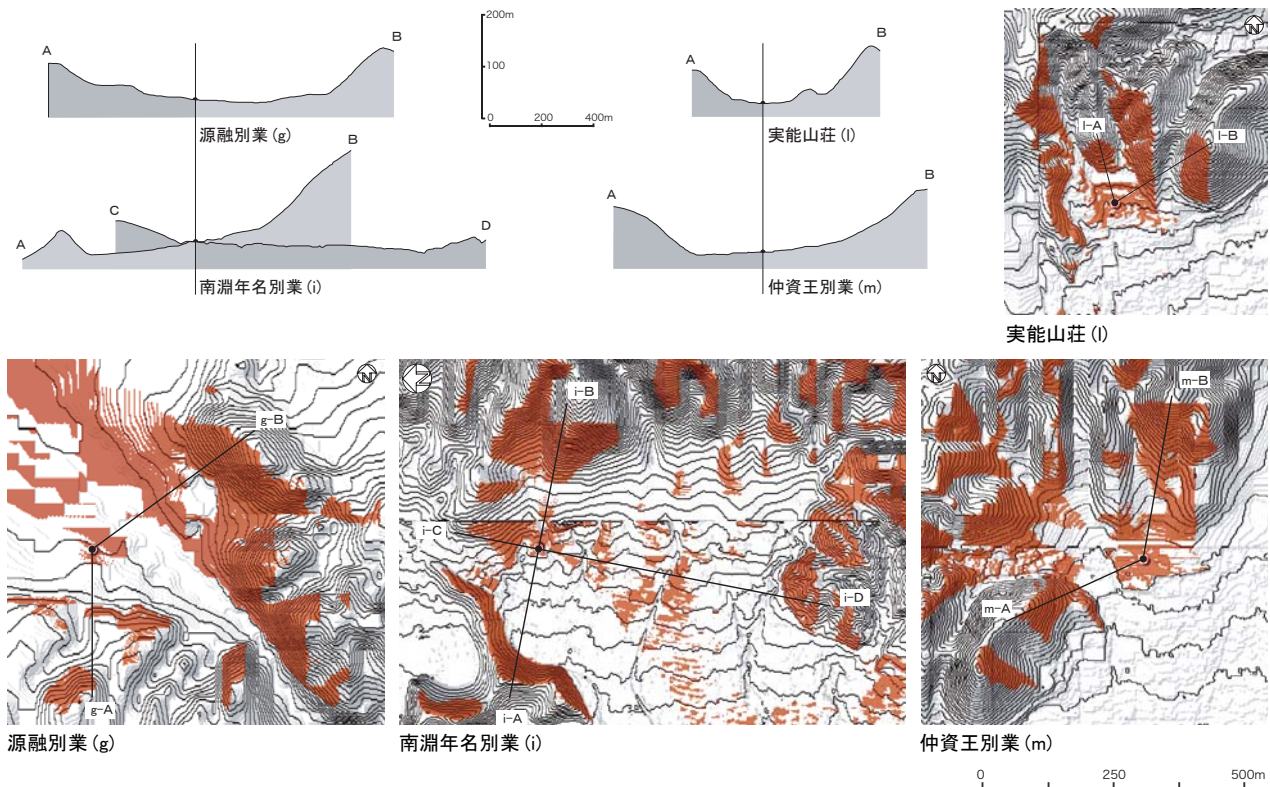


図-11 主な圍繞構成面とその断面構成 (g, i, l, m)

(注：平面図の縮尺は図-10と異なる)

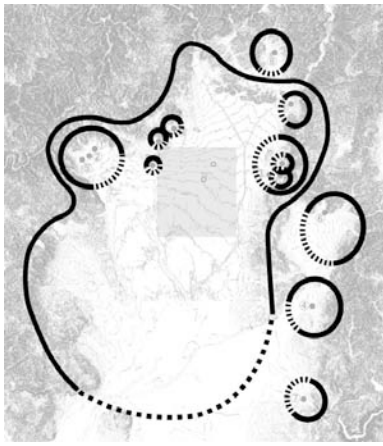


図-12 別業を中心とした地形的圍繞空間の構造

明らかにした別業の共通の空間的特性として、山に囲まれ豊かな自然性を有し、視覚的に閉鎖された領域空間を形成し、見通しに優れていた可能性があったことを示したが、このような空間的特性が、私的空間としての別業の造営地の選定において重要視されていた可能性が浮かび上がった。これらの空間的特性は、都からわずかに数キロメートル離れた場所である別業が、都とは異なる場所として認識されるためには、必要な空間的条件であったと考えることができる。

b) 平安京周辺部における地形的圍繞空間の連なり

以上の考察から、平安京周辺部、すなわち京都盆地の三方の山裾部に立地した別業においては、空間的特性の異なる様々なタイプの地形的圍繞がみられることが分かった。本論では、別業ごとに地形的圍繞の考察を行ったが、この結果を以て再び京都盆地全体を眺めると、平安京周辺部においては、各別業を中心とする様々な形の地形的圍繞空間が連なる構造をなしていると解釈することもできる(図-12)。この地形的圍繞は平安時代の都市構造を読み解く上で、重要な手がかりとなると考えられる。また、このような空間的特性は、現在においても、別業の地を中心とする寺院群や名所の風景の骨格を表しているという点で重要であると考えられる。

4. 結論

本研究で得られた知見をまとめると以下ようになる。
・文献資料の記述から、別業では、周囲の山並みの景観や、山に四方を圍繞されることや、四方を展望することや野の広がりを感じる事が評価されていたことが確認できた。また、地形が別業の地と都の俗塵と隔てる境界として認識されていたこと、別業では山に圍繞されるだけでなく、四方を展望することや野の広がりを感じることも評価されていたことが確認できた。

・平安京郊外の別業を対象に、地形がつくる空間的・景観的特性について、1) 山の仰角と見渡し角度による圍繞性の評価、2) 可視領域・圍繞距離からみた空間の閉鎖性と領域空間の規模の評価、3) 眺望性の評価、を行った結果、1) 別業においては、共通して、二方向以上を視対象となる山に囲まれていた(仰角 5°以上の水平角が 130°以上)こと、2) 別業においては、地形が可視範囲を限定することで、視覚的な閉鎖空間が形成されており、その空間領域の規模は周囲の地形条件によって大きく異なったこと、3) 全ての別業に共通して、地形に圍繞されると同時に、俯瞰景・見通しが得られた可能性があったことを明らかにした。

・視覚的な閉鎖空間の領域規模と、別業周囲の地形条件に着目して、地形的圍繞を類型化した結果、地形的圍繞は、1) 500m 以上離れた山並みによって圍繞され、広大な領域空間の形成がみられた広域圍繞、2) 近距離の山と山並みとの複合的な圍繞がみられた凸型・複合圍繞、3) 凹状地形の内部に位置し、谷による圍繞と山並みとの複合的な圍繞がみられた凹型・複合圍繞、4) 谷による圍繞により、小規模な領域空間の形成がみられた狭域圍繞の4つに分類できた。

・平安京周辺部においては、別業を中心とする様々な形の地形的圍繞空間が連なっていることを明らかにした。

謝辞：本研究は日本学術振興会、特別研究員奨励費20-5405の助成を受けたものである。

参考文献

- 1) 上田篤, 中村良夫, 樋口忠彦編: 日本人はどのように国土をつくったか, 学芸出版社, 2005.
- 2) 樋口忠彦: 景観の構造, 技報堂出版, 1975.
- 3) 斎藤潮, 竹下正俊, 上島顕司: 地形的圍繞の認識と空間規模との関係に関する研究, 港湾技術研究所報告, No.31-2, pp.107-144, 1992.
- 4) 今野久子, 堀繁: 山間部に立地する城下町の領域空間の特性に関する研究, 都市計画論文集, No.33, pp.5-690, 1998.
- 5) 秋本周, 大坪紘子, 堀繁: 山形県村山盆地における集落と山との空間的・景観的關係, ランドスケープ研究, Vol.66, No.5, pp.565-568, 2003.
- 6) 古橋信孝: 平安京の都市生活と郊外, 吉川弘文館, 1998.
村井康彦編: 御所と別業 雅びの系譜, 講談社, 1984.
ほかに本論で参照した他の参考文献など
- 7) 古代学協会, 古代学研究所編: 平安京提要, 角川書店, 1994.
- 8) 山田圭二郎: 「間」と景観 ～敷地から考える都市デザイン～, 技報堂出版, 2008.
- 9) 星野裕司, 斎藤潮: 平安京における葬地の地形構造と都市的機能に関する研究, 都市計画論文集, Vol.35, pp. 793-798, 2000.
- 10) 本中真: 借景, 日本の美術5, 至文堂, pp.38, 1997.
- 11) 前掲 平安京提要
- 12) <http://www.kashmir3d.com/>

- 13) 前掲 平安京提要, pp.506
- 14) 文華秀麗集「春日侍嵯峨山院」より; 小島憲之校注: 懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹, 岩波書店, pp.197, 1964.
- 15) 前掲 懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹, pp.197-198.
- 16) 今浜通隆注釈: 本朝麗藻全注釈一, 新典社注釈叢書5, pp.32-35, 新典社, 1993.
- 17) 「暮秋陪左相府宇治別業即事」, 國史大系第二九卷下 本朝文粹, 吉川弘文館, pp.231, 1937.
- 18) 本間洋一注釈: 本朝無題詩全注釈二, 新典社注釈叢書4, pp.385-386, 新典社, 1993.
- 19) 紫式部著, 阿部秋生訳: 源氏物語5, 椎本, 小学館, 1997.
- 20) 續日本後紀, 承和元(834)年四月二日条; 黒板勝美, 國史大系編修會編: 國史大系 續日本後紀, 吉川弘文館, pp.26, 1953.
- 21) 續日本後紀, 承和一四(847)年十月一九日条; 前掲 國史大系 續日本後紀
- 22) 廣川勝美: 源氏物語の郊野と苑池; 高橋文二: 古代都市文学論, pp.54, 1994.
- 23) 玉上琢彌: 源氏物語評釈 第8巻, 角川書店, pp.287, 1967. 紫式部著, 阿部秋生訳: 源氏物語4, 夕霧, 小学館, 1997.
- 24) 紫式部著, 阿部秋生訳: 源氏物語4, 夕霧, 小学館, 1997.
- 25) 津本信博: 京と鄙の往還, 後藤祥子ほか編: 文学空間としての平安京, pp.74, 勉誠社, 1994.
- 26) ノルベルク・シュルツ著, 加藤邦男訳: 実存・空間・建築, 鹿島出版会, 1973.
- (シュルツは, 囲い込むことによる空間の領域性の発生や, 内側と外側の場所の差異について述べている.)
- 27) ジェイ・アプルトン: 風景と経験, 法政大学出版局, 2005.
- 28) Spreiregen, P. D.: *Urban Design, the Architecture of Towns and Cities*, McGraw-Hill, pp.77, 1965.
- スプライレゲン H, 波派江健朗訳: アーバンデザイン 町と都市の構成, 青銅社, 1966.
- (スプレイレゲンは, 仰角14度以下になると, 囲まれ感が消失すると述べている.)
- 29) 前掲 景観の構造
- 30) 前掲 *Urban Design the Architecture of Towns and Cities*
- 31) Gibson, J. J.: *Perception of the Visual World*, Riverside Press, 1950.
- 32) 高橋研究室: かたちのデータファイル, 彰国社, 1984.
- 33) 前掲 景観の構造
- 34) 内務省: 指定庭園調査報告, pp.3, 1928.
- (1928年の内務省による平等院の現況調査においても「園の形質は良佳, 且つは山河観望の秀景を有するに於て特殊なものであつて, 尊重すべきものである」と評価されている(写真-2参照). しかし, 現在の平等院からは, 山並みを眺めることは出来なくなっており, 評価された景色は失われている.)

(2008. 5. 1 受付)

SPATIAL CHARACTERISTICS OF THE TOPOGRAPHIC ENCLOSURE IN THE VILLAS OF THE HEIAN PERIOD

Keita YAMAGUCHI and Masashi KAWASAKI

There are many places of scenic beauty and Japanese gardens that were originally villas of the Heian period at the base of mountains in Kyoto. In this paper, we discussed spatial characteristics of the villas, especially focusing on the functions of the topographic formation around them. As a result, it is clarified that 1) Most of the villas were surrounded by mountain, 2) the surrounding landform makes enclosed spaces around villas, 3) villas acquired both a prospect and an enclosure. And we categorized spatial characteristics of this topographic enclosure into 4 types according to their topographic conditions and spatial scales, and characteristics of the enclosure. These enclosed spaces around villas clustered in the outskirts of Heian-kyo.